



手書きの文字は味がある、と言われます。手紙では手書きが喜ばれますし、大事な書類のサインは手書きしか認められません。その本人が書いた、ということが重要で、どんな文でもそこには書いた人の個性が表れます。だから、授業のノートもただ書くだけで、本当に授業を分かっているのか、先生方には分かるのです。

本との出会い

芸術科書道 杉村明信

夏のある日、電車待ちの時間、書店に入った。書物を探めるといよりは涼を得たいというのが目的だった。立ち読みを決め込み雑誌コーナーから新刊書へと進んだところで積まれた『一日一書』(石川九楊著、二玄社)を手にした。



歳時記と書の解説本をひとつにしたような内容で、一日一日が短文で実にコンパクトにまとめられている。季節やその日にまつわる話と書に関する話題や文字の見方などが的確につづられ、とりあげられた一文字へのコメントが実に的を得た解説で新鮮に感じた。

スタートの一月一日は「楷法の極則」と称される初唐時代の欧陽詢の「九成宮醴泉銘」が紹介されている。やはりこの文字、この古典からか・・・と納得した。この楷書が楷書の完成形、言い替えれば基本中の基本であるから。



次に我が誕生日の五月十三日の夏を開いた。「母」の字が掲載され、母の日とあった。私が生まれた日も母の日であったそうで、母は、「母の日にあなたを生んで母になったのよ」と話していた。この夏を紹介すると、



母の日。そこで、三筆のひとり伝橋逸勢の伊都内親王願文(八三三年)の〈母〉。日本書史上、最も印象的な〈母〉字である。

最終の長い横画は、うねうねと大きく蛇行する。のみならず、図版からは辿りにくいかもしれないが、終筆部では、いったん左に戻り、そこで筆を返して、左下へ出ていく。それにもかかわらず字形は均衡を失わない。とある。数多くの「母」の文字の中からこの文字を選ん

一文字に込められた『一日一書』杉村明信

だ筆者の観賞と解説に魅力を感じ、その時購入したことを覚えている。

この本には、中国、日本の書道史や書体、篆刻の鑑賞、筆順など書のジャンルにまつわる話題が満載していると言って過言ではない。私は折にふれて、季節を感じたり、教材のヒントにしたりして活用している。

本書の一三五頁五月四日では、



何という字だろうか？
答えは、算木を横に置き並べた形、一・二・三の次だから〈四〉。西周時代の祭器・毛公鼎の内底に鑄込まれた文字である。

まぎらわしかったためか、始皇帝による統一以前の秦の石鼓文に〈四〉の字が現れる。

「三」から「四」への転移は、古代宗教文字から政治の文字へという転換の一風景。

また、同書三一六頁、十月二十七日は「読」が紹介されている。

読書週間。本ほど安いものはない。生涯をかけた思索が高くともゴルフ一回分で買える。ローン、家賃、通信、自家用車費用を生計費で割る新エンゲル係数が近年、急上昇。学生は本も買えない極貧状態？使途を変えれば生活水準は上がるのに。

清の陳鍊の篆刻〈讀(読)〉。

印鑑の欠けは不可。篆刻に欠けは不可欠。



作品は上手、下手で鑑めるのではなく、印象に残る「良さ」を感じるものをヨシとする鑑賞を心掛けたいものだ。

情報通信技術の革命によって、私たちの生活は急速に変貌を遂げつつある。文字はもはや「手で打つ」「声を出せば書ける」時代に突入した。メールの交換はどこからでも指で追うのみである。パソコンのディスプレイに向かうだけで画像処理による活字やフォントの改良が試みられ、従来の手書きの作業は極端に追いやられてしまった。毛筆の使用は「古き善きもの」の範疇でのみ許容されるようになってきている。「人間が手で書く」ことがなくなる。この先、書はどうなるのだろうかと思う。

二十一世紀は豊かな心の時代とも、やわらかな知の時代ともいわれる。日ごとに変革を進める科学技術との共生なくして書の将来はありえないだろう。もともと書は生活に密着した形で、いわば用と美を兼ね備えたものとして発展してきたものだが、用の部分を取り上げられるという危機的な状況の中で、果たして書が生き残ることが出来るのかどうか。生き残りの唯一の手段は、人間の心を揺り動かし深い感動を与えることの出来る質の高い芸術としての表現であろう。

書の見方、楽しみ方をさぐるきっかけをこの本でつかむことができる。三六五の書の古典のよさを感じながら、日頃忘れがちな季節感を大切にしたいものだ。